

情報モラル (4)

インターネットに関しては、日々技術は進歩し、様々な方法で情報に触れることができますから、メールや掲示板、チャット、ホームページ、ネットショッピング、コミュニティ、SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) 等々、一つずつ例示して対処法を指導していったのでは、きりがありません。

これは、一つ一つの対処法を細かく解説するのではなく、まず、先に書いた「誰かをイヤな思いにさせたり、困らせたりしない」という、根本的な姿勢を持つことを学ぶのが一番です。判断の基準を個々人がしっかり持っていれば、その場に応じた対応の仕方を、自分で見つけることができます。こうなっていれば、説明するのは、それぞれの場合での、やり方になります。

インターネット上の様々な場合について紹介して、子どもたちに考えさせる指導は、たとえば、『情報モラル研修教材 2005』などで、様々な事例を挙げて説明されています。

http://sweb.nctd.go.jp/kyouzai_new/index.htm

もっと具体的な授業は、『“情報モラル”授業サポートセンター』でビデオで紹介されています。

<http://sweb.nctd.go.jp/support/>

学年によっては、これをそのまま使うことができますが、上にも書いたように、本当に子どもたちが身につけなくてはならないのは、こういった事例別の対処方法ではなく、あらゆる場面で役に立つ、判断できる力、自分自身の中の、適切な判断基準です。

「(自分自身も含めて) 誰かをイヤな思いにさせたり、困らせたりしない」

このことを、いつも考えて行動できるようにすることです。逆に、インターネットの事例を通して、これを身につけさせる、と考えることもできます。

『モラル』を辞書で調べると、「道徳」という言葉が初めに現れます。つまり、情報モラルの指導は、道徳教育の一環と捉えることができる、ということです。

今の情報社会は、ことインターネットに限らず、様々な手段を通して情報を受け取り、また、誰でも簡単に発信できるようになっています。テレビまでも、これまでの一方通行ではなく、双方向性を持つようになりました。こういった、良きも悪しきも情報の氾濫している中に身を置いているのは、子どもたちも例外ではありません。情報モラルの指導を抜きにして、もはや道徳教育を語ることはできないとも言えそうですが、見方を変えてみると、普段の授業の中にも、情報モラルに通じることがたくさん見つかります。「情報モラルの指導」という言葉にこだわってしまうと、コンピュータやインターネットを使った授業を思い浮かべますが、本当の情報モラルは、ここに限らないということを思ってみると、堅く構えて考えなくていいことがわかりいただけるものと思います。